

川崎大師教学研究 活動報告

平成29年1月1日～12月31日

1. 講演会

◆平成29年度 川崎大師仏教文化講座

「弘法大師の世界」(全6回) 午後2時～3時30分・日曜日開催

・第1回：4月16日

「弘法大師を遍照金剛と唱える^{わけ}意味」 福田亮成所長

・第2回：5月14日

「弘法大師の曼荼羅世界」 小峰彌彦教授

・第3回：6月4日

「弘法大師と山の宗教」 廣澤隆之教授

・第4回：9月17日

「弘法大師がみた世界」 北尾隆心教授

・第5回：10月15日

「弘法大師の文章を学ぶ」 佐藤隆一教授

・第6回：11月19日

「インド密教の教理と実践」 種村隆元教授

◆第18回 公開講演会

11月5日(日) 午後2時～3時30分

「弘法大師の21世紀」 宗教学者 正木晃先生

2. 研究会

◆川崎大師教学研究 研究所「聖教類研究会」(『釈論打集類聚』の研究)

第8回：4月24日(月)

第9回：6月12日(月)

第10回：7月24日(月)

第11回：10月4日（水）

第12回：11月22日（水）

第13回：12月20日（水）

◆川崎大師教学研究所「『羯磨文談義』研究会」

第1回：8月7日（月）

第2回：12月29日（金）

3. 会 議

◆「教授会」・「川崎大師教学研究所会議」

第1回：6月18日（日）

第2回：11月23日（木）

◆『川崎大師教学研究所紀要』編集会議

第1回：3月21日（火）

第2回：11月23日（木）

4. 出 版

◆『お大師さまとともに』第45集

1月1日発行

◆川崎大師教学研究所叢書 第3巻

開創890年記念『平間寺史』改訂復刻版

3月21日発行

◆開創890年記念『川崎大師教学研究所紀要』第2号

3月21日発行

◆開創890年記念『佛教文化論集』第12輯

5月1日発行

「聖教類研究会」活動報告

文責 別所弘淳

本研究会は、川崎大師教学研究所に所蔵される聖教の整理、並びにその研究を目的として発足した。

現在は、江戸期の高野山の学僧である依順房義剛（?～1715）撰『釈論打集類聚』をテキストとして用いている。

『釈論打集類聚』には、「元禄三年八月九日依学道新衆所望草了／仏子義剛□病執毫」、「元禄六年臘月日依人之需走草／義剛」、「元禄七年四月日為或人草了／義剛」、「元禄十二年孟冬晦日為觀海法師新衆備用草了／□峯乞士義剛」と記されており、元禄三～十二年（1690～1699）の間に本書は著されたようである。また、学道衆等の諸人からの要望があったことが本書の著作動機のようにある。更には、表紙等に日付を確認することができるため、本書を参考に、義剛が講義を行っていたことも推測される。いずれにしても、高野山上における『釈摩訶衍論』の修学状況を知るための重要な資料であると評することができる。

本研究会は一～二月に一度のペースで活動し、現在は『釈摩訶衍論』巻一の「或秘觀察～壞論宗故」（大正32・592頁中）を解説する箇所を翻刻、書き下し、和訳を行っている。活動ペースはゆっくりであるが、翻刻、書き下し、和訳の完成を目指して研究を進めていきたい。

『羯磨文談義』研究会」活動報告

文責 佐竹隆信

本研究会は、昨年『羯磨文談義』の研究を目的として発足した。「羯磨」は授戒作法の一部であるが、本『羯磨文談義』は中世律宗における「羯磨」に関する講義の聞書である。室町期の律宗関係資料は少なく、日本戒律史研究の上で貴重である。

研究会のメンバーは以下の通り。

- ・大正大学教授 苫米地誠一
- ・龍谷大学特任専任講師 大谷由香
- ・川崎大師教学研究研究所研究員 別所弘淳（研究会代表）
- ・川崎大師教学課課員 佐竹隆信
- ・大正大学大学院博士後期課程 池田友美

現在『羯磨文談義』は、大正大学図書館所蔵本（旧新大仏寺所蔵本）、西大寺所蔵本、並びに川崎大師教学研究研究所所蔵本の3本（いずれも写本）が確認されている。本研究会では、最も古いと考えられる大正大学図書館所蔵本を底本とし、その他の写本を対校本に用いた。なお、西大寺本の使用に関しては現在申請中である。

本書は、その首題下に「康暦二〈庚申〉十月十八日於禪寂寺始之読師瀧公俗年四十七之御時也」とあり、また奥書に「于時康暦二年〈庚申〉極月廿五日於禪寂寺随聽聞如形抄之講之通百分之一不能記之少々所記誤錯非一以是不可指南穴賢小比丘英空〈生卅五法十六〉」とあることから、康暦2年（1380）10月18日に、禪寂寺にて「瀧公」が行った講義を、12月25日に英空がまとめたものである。

この講義を行った「瀧公」という人物の詳細は不明であるが、英空については、稲城信子『奈良市・西大寺所蔵典籍文書の調査研究』の中で名前を確認することができる。特に、44-47『田夫口決 四王堂十一面法口決上』とされる室町後期の写本には、「于時応安四年（1371）十一月十日於西大寺一室永廖源大徳ノ口決ヲ為後日ノ記憶之分大途記之而已廿二代和上金剛仏子英空生二十六法七夏」とあり、西大寺の系統に属していたことが推知される。

また講義が行われた禪寂寺に関しても、稲城信子氏の同調査研究によって、西大寺の末寺であったことが明らかにされている。

当面は、『羯磨文談義』に関する周辺の調査、並びに翻刻の完成を目指して研究を進めていきたい。